

0.001ミリ単位の“極薄”に挑む職人技で  
日進月歩の進化を遂げる医薬の世界に貢献！

## 製

薬会社などでの新薬開発や研究機関・大学等での基礎研究に欠かせない動物実験。それらの実験動物に投薬による異常がないかなどを検査するために用いるものを「病理組織標本」という。

株式会社バイオ病理研究所は1990年に創業。高品質な病理組織標本の作製によって、高い信頼を得ている企業だ。

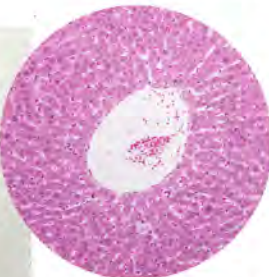
「当社では主に製薬会社や研究機関からの依頼を受け、マウスやラットをはじめとする実験動物から病理組織標本を作製したり、依頼がある場合はさらに病理組織学的検査をし、新薬の申請時に厚生労働省に提出する最終報告書の作成などを行っています」

こう語るのは医学博士でありバイオ病理研究所の所長を務める金林輝彦氏。

病理組織標本の作製は実験動物の器官の切り出し・薄切・染色・品質検査などいくつかの工程に分かれるが、中でも重要なのは実験動物の組織を薄くカットする薄切作業。光学顕微鏡による検査を行えるようにするため、その薄さは3〜5μm(マイクロナートル)ほどだ。これを手作業によって行うが、薄く均一であることが標本の善し悪しを決定する重要な要素だという。0.001ミリという単位に挑む、

行われるが、95年以来、同社は常に評価Aを受けている。

しかし、こうしたクオリティーの高さに加え、「最近では速く大量に病理組織標本を作つてほしいというニーズ



病理組織標本の一例。ラットの肝臓へマトキシリン・エオジン重染色顕微鏡写真

病理組織標本の最終的な品質検査を行う金林智倫氏



まさに職人技の領域だが、金林氏らはスタッフの徹底した教育訓練と万全を期した品質検査によって、高いクオリティーを維持しているのだ。

また、バイオ病理研究所は医薬品G LP実地調査で評価Aを獲得。医薬品GLP (Good Laboratory Practice) とは厚生労働省が定める医薬品の安全性試験に関する基準のこと。3年ごとに調査が実施され、厳しいチェックが

が高まっています」と取締役研究部長の金林智倫氏が代わって指摘する。

「ジェネリック(後発)医薬品の普及もあり、製薬業界では新薬の開発が盛んです。そのため病理組織標本も短期でいかに効率よく作るかが求められるようになりました。しかし、ただ早ければいいというわけではなく、標本の質が落ちれば、その後の検査結果にも影響を与えかねません。標本の作製とともに動物実験の設備を併せ持つている施設もありますが、当社のもう一つの特徴と言えるのが標本づくりに特化することで、高いクオリティーを維持しながら短納期など顧客の様々な要求に対応できることです」

日進月歩の進化を遂げる新薬開発の世界。縁の下の力持ち的な存在であるが、バイオ病理研究所は確かな技術力でその発展に大きく貢献している。



病理組織標本を作製するための薄切作業。スタッフは全員女性

バイオ病理研究所



## 社員の教育訓練の充実と柔軟な研究体制で社会の様々な要望に応える

病理組織標本づくりの中で最も重要な薄切作業は非常に緻密な作業であり、手先の器用さとともに忍耐強さも必要です。そのため社員の教育訓練の充実はもちろん、スタッフのその日の体調なども考慮して作業のシフトを組み替えることもあります。GLPには非常に細かい規定が定められていますが、私たちはそれと同時にフレキシビリティのある研究を心掛けています。



金林輝彦  
代表取締役・研究所長

また、当社は化学物質GLPや農薬GLPの適合確認を受けており、新規化学物質や殺虫剤などの動物実験にも対応しています。最近では食品や工業製品など様々なものの断面を見たいので薄く切つてほしいという依頼が持ち込まれることがあります。多くは取り引きのあった方々からの紹介ですが、私たちの技術を評価していただいた皆様の期待に応えられるよう、これからも研鑽を積んでいきたいと思っています。

### 株式会社バイオ病理研究所

設立 ● 1990年 資本金 ● 1,000万円  
従業員 ● 25人 売上高 ● 3億円  
所在地 ● 大分県国東市国東町小原1200-2  
TEL ● 0978-72-0454 FAX ● 0978-72-2320  
URL ● <http://www.biopathology.jp/>